

独思録：「桜前線が急北上」(3/22)

小西 秀俊

esq-info@esquare-kamakura.net

桜前線が急北上しています。しかし、政治の世界は動いているのでしょうか。

かつては、桜は入学式を祝い、プロ野球開幕を彩る花だったような気がします。最近では、卒業式を祝い、選抜高校の熱戦を応援する花になったような気がします。加えて、今年は、WBC (World Baseball Classic) の侍ジャパンを応援する花になっています。

桜前線の北上は、年々早まっていますが、政治の世界は相変わらずです。

薄田泣菫に「桜の花」という随筆があります。

「桜こそは、春の花のうちで表現の最もすぐれたものの一つであります。しとしとと降り暮らす春の雨の冷たさに、やや紅みを帯びて悲しさうにうなだれた蒼といふ蒼が、一夜のうちに咲き揃つて、雨あがりの金粉をふり撒いたやうな朝の日光のなかで、明るくほがらかに笑つてゐる花の姿は、多くの植物に見るやうな、蒼から花への発展といふよりも、むしろすばらしい跳躍であります。感激といふよりも、驚異であります。第二楽章なしに直に第三楽章への躍進であり、表現と高興との中心への侵入であります。蘇へる生命の歡びに、やつと新芽を吹いたばかりの草も、木も、饒舌家(おしゃべり)の小鳥も、沈黙家(むつつりや)の獣も、さすらひ人の蝸牛も、地下労働者のもぐらもちも、みんな魔術にでもかかつたやうに、いい気持になつて夢を見てゐるなかに、この桜の花のみは、ながい三春の歡樂を僅二日三日の盃に盛つて、そこに白熱した生命の燃焼と豪奢の高興とを味ひつくさうとするのであります。恋をするものは、道を歩くにも決して後をふり向かないといひます。」

世の中は、經濟危機の嵐にもみくちゃにされ、雇用不安、生活不安の暗雲が立ち込め、お花見どころではないのかもしれないかもしれません。映画「キューポラのある街」が話題になった半世紀前も貧乏と貧困が日本の社会を覆っていました。しかし、当時と今とでは、貧乏と貧困の質が違います。少なくとも「キューポラ」という拠り所があり、現在のように、職を失い、たちまち困窮するやうな「今日の勤労が明日の暮らしの保証にならない」という殺伐たる雇用形態ではありませんでした。今よりは、ずっと国民の皆が希望への処方箋を持っていた「貧しいながらも楽しい社会」であつたやうな気がします。

随筆は「むかしの詩人は、さまざまの事思ひ出す桜かな といひましたが、それはその詩人自らの追想であつて、桜には何の追想もありません。」と続きますが、まさに、桜と違い、人は昔を振り返り、未来への希望が持てなければ生きていけない動物です。

最近のニュースでは、生活保護の受給者が過去最多(1月の統計)になり、給食費や授業料に事欠く家庭も増えているとまで報じ、NHKテレビの特集でも「医者にかかるお金がなくて学校の保健室に駆け込む子らを伝えていた。治療を受けに熱を押し登校する。その姿は切なく痛々しい。」と特集しています。国民の皆が希望への処方箋を持っていないようです。

「日本を明るく強い国にする」と宣言し、半年前に船出した麻生内閣は、各界有識者を集めて危機克服の策を図ろうとしているようですが、果して、集めた英知を、大胆に活かせるでしょうか。今の麻生内閣は、トップの座にひとたび就くと、降りたくなくなる人が少なくない典型のような気がします。

支持率が低ければ挽回するまでと「今の世界的経済危機はアメリカ発であり、自分には責任ない。景気対策を早急にやる責任がある。それを実施することを第一義と考え、全力投球しているので、支持率が低いことと解散総選挙とは関係ない。」と言い切って、衆院の任期満了まで解散しない模様です。

何か、麻生内閣の現状が、随筆の

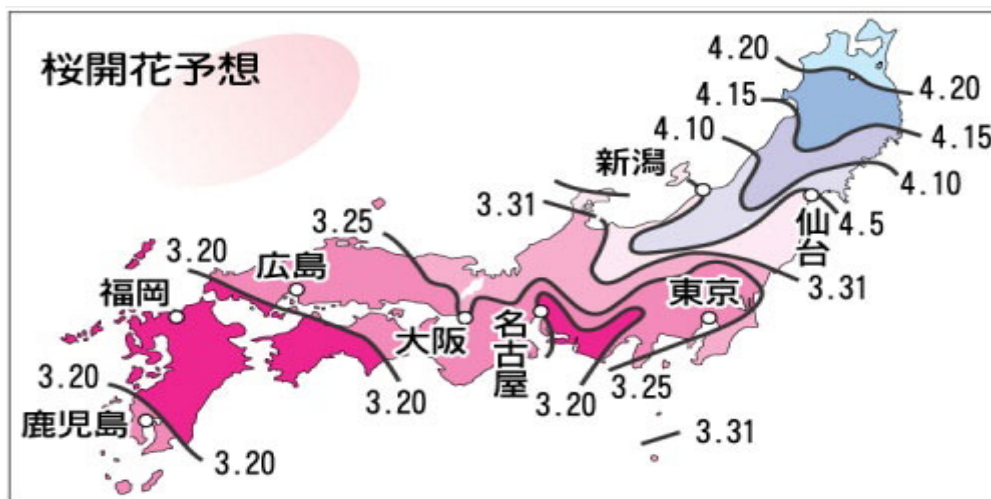
「追想するほど自分とかけ離れた自分を持たないからであります。張りきつた恋愛の激情には、子女の繁殖など思ふ余裕はありません。それ故に桜の花は、梅や杏のやうに実らしい実を結ばうとはしません。」に通じる、「国民が苦しんでいるほど、自分とかけ離れた感覚を持たないからであります。張りきつた保身の激情には、国民の苦しみなど思ふ余裕はありません。それ故に麻生内閣は、国民の望むような実らしい実を結ばせようとはしません。」

と、各界有識者を集めた諮問委員会が「儀式」で終わってしまう懸念を捨てきれません。定例総理会見にもWBCの話がありましたが、暫らくは、WBC侍ジャパンを応援して、政治のことは忘れていてくれではなく、第二楽章なしに急ぎ政治の歩みを速めて下さい。

毎日：「桜開花予想：さらに早く」(3/19)

気象庁は18日、東北から九州にかけての桜(ソメイヨシノ)の開花予想を発表した。今月も気温が平年より高く推移し、特に今週は上がっているため、前回(11日)発表に比べ3日以上早い開花を予想したのが12地点あった。東京も前回より3日早い21日。今回が初めての発表となった東北は、各地で平年より2~7日早く開花するという。

一方、九州や四国、東海では計9地点で開花。福岡、宮崎、松山、下関の4地点は1953年の統計開始以降最も早く、熊本、大分、厳原(長崎)の3地点も2位の早さだった。



主な開花予想日

20日 = 甲府、名古屋、静岡 21日 = 東京、横浜 22日 = 熊谷 23日 = 宇都宮、京都
24日 = 水戸 26日 = 前橋 28日 = 大島 29日 = 三宅島 30日 = 銚子 4月
3日 = 八丈島 4日 = 福島 5日 = 仙台、新潟 6日 = 長野 12日 = 山形 15日 = 秋
田 17日 = 盛岡 24日 = 青森

< 薄田泣菫 (1877-1945) >

詩人。本名、淳介。岡山県浅口郡大江連島村（現在の倉敷市連島町）生まれ。

岡山県尋常中学校（後に第一岡山中学校。現在の県立岡山朝日高校）を中退。



1894年上京し、上野書館に通いながら塾で独学。1897年帰郷すると、詩を作り「新著月刊」に投稿、後藤宙外、島村抱月らに絶賛され掲載された。

翌年第一詩集『暮笛集』を刊行、「小天地」を編集しながら「明星」などに詩を載せ、古語や漢語を多用した詩風で、蒲原有明とともに泣菫・有明時代を築く。

明治の終わりごろから随筆に転じ、国民新聞社、帝国新聞社に勤めた後、大阪毎日新聞社に移り、1915年、「茶話」の連載開始「茶を飲みながら喋る気楽な世間話」として、古今東西の噂話、失敗談、面白おかしい話を幅広く紹介している。

作品に『暮笛集』『白羊宮』『ゆく春』などの詩や『茶話』『艸木虫魚』などの随筆がある。

< ワールド・ベースボール・クラシック (WBC) >

北米・中南米・東アジア・欧州・アフリカ・豪州から合計16の国と地域が参加する、野球の国際大会である。

メジャーリーグ (MLB) では米国国外出身の選手が増え続けており、また野球界の発展のためにもさらなる国際化は必要不可欠との認識があり、メキシコや日本で初めての MLB 開幕戦を行うなど「グローバル戦略」を掲げて来た改革派のメジャーリーグコミッショナー、バド・セリグの提唱により、関係各所でプロ選手（特に国際野球連盟 (IBAF) に参加していないメジャーリーグ選手）参加による真の世界一を決める国際大会の開催へ向けて協議がなされて来た。その結果、2006年に第1回大会（アメリカ合衆国をメインに、プエルトリコ、日本の3ヶ国・地域共催）の開催が決定した。

MLB 機構はこの大会をオリンピックに代わる野球界主導の最高峰の国際大会として育てたい意向である。



'09 WORLD BASEBALL CLASSIC

ワールド・ベースボール・クラシック

<http://www.npb.or.jp/wbc/>

春秋：「袴姿の女性」(3/16)

街なかでふだん見かけない袴（はかま）姿の女性の集団を目にすると、春の訪れに気づく。大学の卒業式で大正ロマン風の女学生姿が流行し始めたのは20年余り前。一時のブームに終わらず、いまや制服のない高校や、小学校にも広がっている。

城一夫氏の著書「日本のファッション」によれば、明治初期の華族女学校設立時、制服として考案されたのが、海老（えび）茶の袴だった。着物と異なり裾（すそ）の乱れを気にせず颯爽（さっそう）と歩ける。女性が活動的になった時代の空気も後押しし、短靴とあわせた女学生スタイルは女学校が増えるのに伴い各地で大流行したようだ。

彼女らを揶揄（やゆ）する「海老茶式部」なる言葉も生まれた。社交や自己表現を大切にしている女学生文化に、内面の教養を重視する旧制高校育ちの男性はカチンときたらしい。その奥に、自分たちの教養こそ西洋からの借り物ではという男性側の不安があったと、教育学者の稲垣恭子氏は著書「女学校と女学生」で分析する。

戦後も女子学生亡国論なる議論があった。雇用機会均等法以降は「男並み」に働きつつ「女らしく」も振る舞え、というむちゃな要求を女性は時にやり過ごし、時に抗議しつつ、居場所を広げてきた。いま社会に旅立つ皆さんも、袴姿に先達の心意気を感じつつ、それぞれの困難を乗り越え活躍してほしいと願う。

< 城一夫 (1937-) >

東京都生まれ。青山学院大学英米文学部卒業。

城デザイン研究所主宰を経て、共立女子短期大学生生活科学科カラー＆デザイン研究室教授を経て同名誉教授。

専門は色彩文化・文様文化・ファッション文化の研究。COLOR SESSION 2007 実行委員会委員長。

著書にフランスの伝統色、西洋装飾文様事典、日本のファッション（明治・大正・昭和・平成）、西洋染織模様の歴史と色彩、ファッションの原風景、生活デザインの社会学など。



< 稲垣恭子 (1956-) >

教育学者。広島県生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士課程中退。

現在、京都大学大学院教育学研究科教授。

専門は教育社会学で、とくに学生・生徒文化や教師－生徒関係の特質、「子ども」「若者」などの社会的表象の意味とその変容などについて、文化社会学・歴史社会学的な角度から研究。現在は、「たしなみ」をキーワードとした教養文化の研究、学生調査や自伝・小説を素材とする学生生活や学生・生徒文化の研究、女学生・女子学生の文化とその社会的表象について取り組む。

著書に『女学校と女学生』『子ども・学校・社会』『不良・ヒーロー・左傾』など。

天声人語：「俺にもやれそう」(3/19)

野球のファンなら一度はやってみたいのが「監督」だと聞いたことがある。そうした監督への憧（あこが）れについて、作家の丸谷オーさんが、「あれなら俺（おれ）にもやれそうだ」という感じがするからだと書いていた。

投手など夢にも出来そうにないし、目の前でバットを振り回される捕手もかなわない。打つのも難しい。だが采配なら俺でも　というわけだ。だからファンはとにかく監督の悪口を言いたがるのだと、丸谷さんは説をとなえている。

キューバのカストロ前議長も今はそのくちか。WBC日本チームの原監督の采配を批判したというニュースが面白かった。9日の韓国戦で、一塁にイチローを置いてバントさせたのを「ミステーク」と評した。つまり「あそこはバントじゃないよ」と。

学生時代に選手だったと聞いてはいたが、一家言あるようだ。療養中と伝わる指導者の意外な素顔に頬（ほお）がゆるむ。日本はその後、キューバを退けた。しかし昨日の韓国戦では苦杯をなめた。カストロ氏はまた辛口の批評を楽しんでいるだろうか。

スポーツ観戦は、勝者の得るものと敗者の失うものの落差が大きいほど興奮するという。オールスターゲームは続いてきたが、あれは球宴。祭りであって勝負ではない。オールスターが他国と競う高鳴りは、野球の新しい楽しみになった。

それにしてもあの花形選手たちの、高校球児のように一途な表情はどうだ。今日は敗者復活のキューバ戦がある。勝てば準決勝だが、負けた方に次はない。カストロ氏を悔しがらせる投打と采配の冴（さ）えを見たい。

読売：「WBCキューバの敗因は『栄光にあぐら』...カストロ前議長」(3/21)

「過去の栄光にあぐらをかいていた」。

キューバの野球代表チームがWBC 2次ラウンドで敗退し、1959年のキューバ革命以来、主な国際大会で初めて決勝進出を逃したことに対し、フィデル・カストロ前国家評議会議長は19日、インターネットに掲載した論評でチームの問題点を指摘した。



キューバは革命後、全国にスポーツ専門の小学校を設けて英才教育を施しており、最も成果を上げたのが国技の野球だった。アマチュアリーグから選抜された代表チームはスピードとパワーで圧倒し、92年バルセロナ、96年アトランタ、2004年アテネの各五輪で金メダルを獲得した。

だが、最近では「慢心」も見られるようだ。中日ドラゴンズでもプレーしたりナレス元内野手は1月、国営テレビの取材で「最近の選手はバントやサインの読み方も知らず、基礎ができていない」と指摘した。

<丸谷オ一（1925-）>

小説家、文芸評論家、翻訳家。山形県鶴岡市出身。東京大学文学部英文學科卒。

『年の残り』で第59回芥川賞、『たつた一人の反亂』で谷崎潤一郎賞、『後鳥羽院』で讀賣文學賞、『忠臣蔵とは何か』で野間文藝賞、『樹影譚』で川端康成賞を受賞。

主な小説に『笹まくら』『エホバの顔を避けて』『横しぐれ』『裏聲で歌へ君が代』『女ざかり』など。

評論・エッセイ集として『文書讀本』『桜もさよならも日本語』『言葉あるいは日本語』『古典それから現代』『夜明けのおやすみ』『コロンブスの卵』『食通知つたかぶり』『挨拶はむづかしい』など。



編集手帳：「見合わせ桜」(3/20)

江戸の昔には 見合わせ桜 という言葉があったという。鶴ヶ谷真一さんの随筆集「月光に書を読む」(平凡社)を読んでいて教えられた。

遠方の桜の開花を知るために、江戸人はそれと開花期を同じくする近くの桜を見定め、これを 見合わせ桜 と呼んだという。例えば、奈良の春日神社で大鳥居の左右にある一対の桜は吉野山の 見合わせ桜 とされていたそうで、鳥居の傍らで花を仰ぎつつ人は、満山これ桜の吉野山を脳裏に描いたのだろう。

遠方にお孫さんのいる方が近所に住む同じ年ごろの子供を見て、「孫の背丈もこのくらいに伸びたかな」と想像する心にもどこか似ている。

きょうは彼岸の中日、桜の開花は例年よりも幾らか早いと聞く。ほころびた花の下、墓前に香華を手向ける人の姿があちらこちらで見られるかも知れない。

墓参りの道すがら、行き会う人を 見合わせ桜 にして、亡き母も達者でいればこの人のようであろうか、幼くして逝ったわが子もほんとうならばこのくらいの年恰好(としかっこう)であろうか...と、故人の面影に歳月を重ねてみる方もおありだろう。心眼にだけ映る天上の花がある。

<吉野山の桜>

『これはこれとはばかり花の吉野山』と貞室が詠んだように、吉野山の桜は、尾根から谷を埋め、爛漫と咲き誇るその見事さで広く知られています。

吉野山が桜の名所となったのは、今から1300年前、役行者が金峯山寺を開くとき、感得した蔵王権現を桜の木に刻んだことから、ご神木として保護されてきました。

現在200種約3万本、多くがシロヤマザクラ。若葉と同じくして開花するので、凜とした気品が感じられます。



<鶴ヶ谷真一(1946-)>

エッセイスト。出版社パピルスの編集長。東京生まれ。早稲田大学文学部卒。

『書を読んで羊を失う』で、第48回日本エッセイスト・クラブ賞受賞。

他に『猫の目に時間を読む』『月光に書を読む』『古人の風貌』『シンデレラの時計』など

余禄：「桜前線急北上」(3/20)

「その村全体が多くの苗木園で網羅され、それらを連絡する一直線の道が1マイル以上続く。私は世界のどこでも、こんな大規模に売り物の植物を栽培しているのを見たことがない。植木屋はそれぞれ3～4エーカーの地域を占め、数千の植物がよく管理されている」。

幕末、英国の植物採集家フォーチュンが園芸で名高い江戸の染井村(今の駒込)を訪れ、その壮観に驚嘆した時の記述だ。異説もあるが、桜のソメイヨシノはこの染井村で江戸中期から幕末にかけ育成されたという。かつての園芸村の栄光もその名によって今に残ることになった。

例年そのソメイヨシノの開花情報とともに各地に広がる日本の春だ。今年は季節先取りが大好きな日本人もあわてるほど早い桜前線の北上が続いている。13日に開花した福岡はじめ九州や四国では観測開始以来最も早いという地点も目立つ。

東京でも平年より7日も早い明日が開花予想日となった。桜前線の北上を早めた陽気はむろん一時的なものに違いない。だがどうしても頭をよぎるのは「地球温暖化が進めば、21世紀末にソメイヨシノの開花日は最大4週間近く早まる」と先日報じられた九州大のチームの分析だ。

なにしろ冬の間、10度以下の寒気に2カ月はさらされないと花を開かないというソメイヨシノである。先の今世紀末の予測によると、南九州などでは冬の気温上昇により満開にならなかつたり、まったく花が咲かない地域も出てくるという。

日本における季節の花を「永遠の暦」と呼んだのも来日外国人だった。日本人が自ら作り出した「永遠の暦」の傑作といえるソメイヨシノだが、目立ち始めた暦のズレがこの先心配だ。

<ロバート・フォーチュン(1812-1880)>

スコットランド出身。植物学者。中国からインドへチャノキを持ち出したことで有名。

エジンバラ王立植物園で園芸を修め、ロンドン園芸協会で温室を担当し、北東アジアの植物に興味を持つ。



1842年、南京条約ののち、中国で植物を集めるために派遣され、中国産の多くの美しい花をヨーロッパへもたらした。英国東インド会社の代表として1848年から3年間インドに旅行し、ダージリン地方への20,000株のチャノキ苗の導入をはじめ、インド、セイロンの茶産業を成長させ、ヨーロッパの茶市場における中国茶の独占を終了させる重要な成果をあげた。

後の旅行では、台湾と日本を訪れて、養蚕および稲の栽培について記述し、キンカンを含む多くの樹木および花を調査、収集しヨーロッパに導入した。